

現代に学ぶギリシャ語・ラテン語

本学学生を始めとして、オープン科目を受講している高校生や他大学生に、ギリシャ語・ラテン語を学ぶことを通して文化の面白さを伝えようとしてされている宮城徳也さんにお話を伺いました。

- 専門の西洋古典学について

直接の専門はラテン文学で、ローマ時代の詩がテーマです。そのためにはギリシャ古典文学、ヘレニズム文学に遡ることが必要で、ローマの影響を受けたヨーロッパ文学も視野に入ります。それだと守備範囲が広すぎるので、叙事詩人のウェルギリウスと、哲学者でギリシャ悲劇の翻案をラテン語で書いたセネカを中心に研究しています。博士論文の題材はセネカの悲劇でした。あんまりたくさん言うと、本当にそんなに出来るのかって言われそうですが(笑) アレクサンドロス大王がペルシャ帝国を併合して大帝國を建設した後の時代、ヘレニズム時代にテオクリトスという牧歌文学の創始者といわれている詩人がいます。牧歌文学は、田園や羊飼いを描いていながら、実は都市の文学です。それをローマで引き継いだのがウェルギリウスで、彼を手本にして後世の多くの詩人が牧歌を書きました。牧歌文学には諷刺やアレゴリーなど様々な要素が含まれていて、それぞれが書かれた時代の文化論になっているので、その研究はおもしろいと思います。牧歌文学をヒントに古代、中世、ルネッサンスから現代までの時代精神やその連続性を考えてみたいと思います。それは生きているうちには出来ないでしょうし、世の中の役には立ちませんが、個人としては充分楽しめそうです。大きなテーマを念頭に置きながらも、作品を読む時は、一字一句にこだわって、深く読み込むことも研究者として誠実にやっています。

- 授業へのスタンス

授業では自分の専門よりも、学生の皆さんがギリシャ・ローマに興味を持ってくれることが大事だと思っています。文学の研究者ですから、作品を原文で徹底的に読み込むという姿勢を大事にして、できれば授業にもそれを活用したいと思います。一方で教員として、いかに学生の関心を文化的なものに引きつけていくか、「文化っていうのも面白いんだよ」という方向に持っていくかが常に念頭にあります。文学部の他の先生方もそうだと思います。

- 英文学の授業について

一文では英文学専修に所属していて、二文の授業もそれを前提に担当しますので、卒論指導は『嵐が丘』から児童文学まで幅広く扱います。多くの場合専門ではありませんが、テキストを読み込んで、文学研究者としての視点は提供できると思います。新入生向けの基礎演習でマザーグースを扱っていますが、背景にある歴史や民間伝承はギリシャ、ローマ、中世ヨーロッパ、近現代のイギリスにも関係します。歌もあって、自分がまず楽しんでます。ヘレニズムとマザーグースは、直接の関係

はないですが(笑)。でも、文学のテキストを読むという一つの実践として、童謡も文学として読める、そこからいろんな方向へ広がっていくように工夫はしているつもりです。

- 現代の学生がラテン語、ギリシャ語を学ぶことについて

文法は英文法と同じで、それ自体がものすごく高級のものではないですよね。何でギリシャ語、ラテン語が難しいかは、普段の生活とあまり関係がないからでしょう。ただ、キリストの磔刑図に書かれた文字や、街でみかける看板の標語や、店名がラテン語だった場合、一部でも意味が分かれば面白くて、それが「分かる快樂」というレベルでも別にかまわないと思います。ギリシャ語、ラテン語の授業には特に力を入れていますが、馬を水場に連れて行っても、馬が水を飲みたくなければ意味がありません。早稲田で授業を担当できて幸せなのは、学生に素質と知的好奇心があるということです。そうでなければ古典語の授業は絶対に維持できません。皆さんのギリシャ・ローマへの関心に応えて、更に持ち続けてもらえる形をいつも模索しています。一番興味のあることとギリシャ・ローマ文化の関連性を大事にしてほしい。何かに興味がある人はどこかでそれにぶつかると思います。そもそも、担当している「入門ギリシャ語」、「入門ラテン語」、「ギリシャ・ローマの思想と文化」などはそういう趣旨の授業ですから。

- 高大一貫教育でのギリシャ語・ラテン語

各学部から科目を提供するに際して、文学部では、オンデマンド授業以外は高校生が受講可能な時間帯で、オープン科目というのは「入門ギリシャ語」、「入門ラテン語」、「ギリシャ・ローマの思想と文化」だけでした。果たして来てくれるかなという気持ちは正直あったけど、蓋を開けたら三、四人ずつ来てくれました。受講している高校生は能力が高いので、特別扱いはいしていません。特に文学部志望でなくても良いと思っています。他学部や他大学へ進学しても、ギリシャ・ローマに興味を持ち続けてくれれば、高大一貫教育に関わる励みになります。高校でも高度で多岐に渡る科目を学んでいるはずなので、そっちを優先させてほしいと老婆心ながら思いますが。

インタビューを終えて

先生の研究室の扉にはギリシャ・ラテンに興味を持った学生のために質問箱が常設されています。先生の授業に対する熱意と併せて、いつでも多くの学生に潤った水場が確保されていることを実感しました。

文学部助教授 宮城 徳也さん



【みやぎ とくや】

1958年岩手県生まれ。
早稲田大学大学院文学研究科修士課程、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。甲子園大学経営情報学部専任講師、早稲田大学専任講師を経て、99年度より現職。
専攻分野：西洋古典学(ギリシャ・ローマ文学) 16世紀英文学
趣味：音楽鑑賞(クラシックのみ)、映画鑑賞(もっぱらDVD)、山歩き(低山のみ)

主要業績：

『セネカ悲劇集』(共訳) 京都大学学術出版会
『古代ローマ喜劇集』(共訳) 京都大学学術出版会
『キケロー選集』(共訳) 岩波書店